



1 万人収容可能な大規模避難所となる スポーツ・文化複合施設「かみす防災アリーナ」の 防災啓発活動

茨城県 神栖防災アリーナ P F I 株式会社

1 はじめに

茨城県の東南端、利根川の河口に位置し、鹿島臨海工業地帯を有する神栖市に、2019年、スポーツ・文化複合施設「かみす防災アリーナ」が開業しました。同施設は、市民がスポーツや文化に親しむ憩いの場・交流の拠点であると同時に、災害時には地域防災拠点として、市民の避難所にも位置づけられており、その避難者数は一時避難時10,000人、中長期避難時2,000人が想定されています。本稿では、こうした大規模避難所となるかみす防災アリーナでの防災啓発活動について紹介します。

2 施設の建設背景

2011年3月11日の東日本大震災で神栖市は津波や液状化等の甚大な被害があり、2014年にオープンした神栖中央公園の敷地内に、避難施設とスポーツ・文化を育む施設を一体で整備する構想となりました。スポーツ、文化、防災というキーワードのもと、設計施工から運営までを担うPFI（民間資金等活用）事業としてプロジェクトが進行し、平常時と災害時のフェーズフリーを目指した施設として、音楽ホール、

プール、体育館が一体となった公共施設「かみす防災アリーナ」が2019年6月に開業しました。

3 施設の特徴

施設のコンセプトは、『「もしも」のときも、「いつも」のところへ』です。平常時から地域コミュニティづくりと、住民の自発性を促す施設を目指し、そのことが災害時の助け合いにも繋がるのではないか、スポーツ・文化・防災を融合し、①スポーツと文化をつなぎ新たな出会いと交流を生む活動の場、②公園一帯利用による憩いの場、③平常時の賑わいが助け合いにつながる防災の場となることを目標とし、平常時・災害時の双方で役立つ施設が企画されました。

施設の設備は、備蓄倉庫が隣接されたメインアリーナ、生活用水源となるプール、多めに設置されたトイレ等、災害時の利活用を想定した設計となっています。備蓄品として、2,000人×3日分の非常食のほか、水、パーテーション、毛布、粉ミルク、おむつなどが確保されています。また、電力源としてコンセントや非常用発電機（3日間対応可）を備えています。

利用者同士の交流が自然と生まれる開放的な空間の工夫として、約170m×10mという広がりのある吹き抜け空間の共用部をコミュニケー



かみす防災アリーナ外観写真



コミュニケーションコリドーの写真

ションコリドーと名付け、公園側に大きく開放感のある空間を設けています。この場合は各施設同士の共用領域にもなり、利用者が居心地のよい時間を過ごしコミュニケーションを誘発することが期待されています。

4 防災啓発活動

開業後の運営事業者である神栖防災アリーナPFI株式会社は、コロナ禍の影響を受けながらも6年間にわたり定期的に防災啓発活動を積み重ね、現在に至っています。具体的には、神栖市と連携した親子体験型の防災イベントの開催、防災グッズの配布、防災講演会の開催、防災目的の市外からの見学会、豪雨や暴風の体験も交えた防災訓練の実施等です。

2024年6月には、1月に発生した能登半島地震の避難所生活支援の実体験に基づく教訓共有や、災害支援関連企業・団体との連携強化、防災と地域医療との関係づくりを目的とした「知って・つながる・防災展」を開催しました。防災展の中で実施した親子参加イベント「ぼうけんフェス」では、「防災と健康を楽しく学ぶ」を合言葉に、包帯を使った応急手当の体験や、実際の医療機器に触れる体験も盛り込み、楽しみながら防災意識が向上したとのご意見を多数いただくことができました。さらに、「いつも」と「もしも」の両面を考慮した避難所の建築デザインを検討する大学の授業において、本施設が具体的題材として取り上げられ、学生からの数多くの提案もいただいています。



親子で体験する避難スペース設営イベント
(2023年防災アリーナ避難訓練)



防災と健康を楽しく学ぶ「ぼうけんフェス」
(2024年「知って・つながる・防災展」)



防災展示ブース
(2024年「知って・つながる・防災展」)

5 おわりに

大規模な避難所を長期間にわたり運営するためには、市のイニシアチブのもと、施設管理者だけでなく、様々な専門技術・技能を有する企業や団体と、平時から「顔の見える」関係性をつくり、連携の輪を広げていくことが重要だと考えています。ハード対策とソフト対策がかみ合った「これからの避難所」のあり方を発信していけるように、今後も地域の方々と手を携えながら、実践を積み重ねていきます。